第480号 昭和60年 6月20日発行（毎月20日発行）
昭和46年8月31日第三種郵便物認可

1985年（昭和60年）
6月号（No. 480）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

ヒマラヤの環境保全　沼田　真……(1)
八十周年記念絵画・写真展のお知らせ……(1)
ピッケル雑記　平柳一郎……(2)
海外の山……(3)
「すべてわが山頂」
エルクのピッケル借用お願い……(4)
図書紹介……(4)～(6)
「ネパール研究ガイド」「カンテラ日記」「大登会年誌」
山崎安治君を悼む　関根吉郎……(5)
東西南北……(6)
「会員通信」「アラスカへ行きたいと思っている方へ」「三水会現地集会」
第22回『この一本展』（下）図書委員会……(6)
会員懇談会報告……(6)
洋書購入のお知らせ（つづき）及び図書受入報告……(8)
会員移動・会務報告・ルーム日誌……(9)～(11)
八十周年第二次募金応募者ご芳名…(11)
お知らせ　北海道支部，科学委……(11)

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祝日・月曜を除く毎日
13時～20時

ヒマラヤの環境保全

沼田　真

私はわが国の自然環境保全には長いこと心をくだいてきたが、一九七〇年のヨーロッパ保全年の行事にいくつか出席して、わが国の行き方は特殊な形のものだと痛感した。それは住民運動にしても行政にしても、公害と自然保護はべつべつなのであるが、ヨーロッパ保全年の保全（コンサベーション）は両方とも全く一緒なのであった。一九七〇年の時に私が出た一つは世界食糧会議の環境問題パネル討論（オランダのハーグ）で、私は五人のパネラーの一人、唯一のアジア人として日本の公害にきびしい質疑と批判をあびた。そのつぎに出たのは「動植物群集の保護と管理」という自然保護の国際シンポジウム（イギリスのノーリッチ）で、この二つともヨーロッパ保全年の行事であった。一九七二年には国連の人間環境会議が行なわれたが、その準備会議に出席した外務省の人は、人間環境というからてっきり公害問題だと思って出席したら、自然環境、生態的開発、資源管理、環境教育など幅が広いので恥ずかしい思いをしたといっていた。

この時の決議によって、ナイロビに国連の環境計画事務局（ユネップ）ができ、ユネスコの生態科学部では「人間と生物圏」（MAB）計画の調査研究をはじめた。その第六プロジェクトが「山地およびツンドラ生態系に対する人間活動の影響」というもので、これに関する地域集会が三回行なわれた

八十周年記念絵画・写真展（略称　会員展）のお知らせ

創立八十周年を記念して日本山岳会々員の制作になる山岳に関する絵画や写真の展示会を左記のように行ないます。ご応募ご鑑賞下さい。

一、名称　「八十周年記念絵画写真展」（日本山岳会々員による）
一、場所　〒102千代田区丸の内二―三―一　三菱商事別館内　「三菱センター」
一、期間　昭和60年8月19日(月)～8月23日(金)
一、開館時間　午前9時半～午後5時　ただし23日（金）は正午まで
◎応募規定は左の通りです。
一、作品の数と大きさ　絵画については一人なるべく一点とし、大きさは20号以内。写真は一人一点限り、大きさは半切、フレーム入とする。
一、申込は必ず一点毎に各自左記必要事項をA4（会報の大きさ）大の紙に記入して行なう。（申込書とする）
一、申込書の記入事項
(1)題名（20字以内）
(2)作品の地名
(3)会員番号
(4)氏名
(5)住所（郵便番号）
(6)作品の大きさ
(7)会員展終了後の受取方法（次のいずれかを選択）
a．8月23日正午に会場で引取り
b．8月29日（木）～31日（土）の間に日本山岳会々室で引取り
c．宅急便で輸送希望（八月末発送）
この申込書は三枚作成し、二枚は申込用紙として使用、一枚は必ず作品の額乃至フレーム裏面に貼布する。
一、宛先　日本山岳会内「会員展」係
一、申込期限　昭和60年7月15日（月）
一、申込金　無料、ただし「会員展」終了後作品の返送を希望する会員は、梱包輸送費二千円也を同封のこと

みんなで八十周年記念事業を成功させよう！

お知らせ電話 234六六五九

（オーストリアのザルツブルク、ノルウェーのリレハンマー、そしてネパールのカトマンズ）。私はそのいずれにも出席したが、その一九七五年のカトマンズ集会の時に、山岳地域の保全と開発の研究や研修を行なう国際的センターが必要であることを決議してユネスコに要望した。現在王立科学技術アカデミーの責任者であるラトナ・ラナ氏が当時マブ計画の委員長で、以後八年間諸種の準備がすすめられた結果、一九八三年マブ計画十周年の「生態学を現場で」というスローガンの下での記念集会が行なわれた時に、このセンター設置のための調印がパリで行なわれた。これがＩＣＩＭＯＤ（イシモド、国際山岳総合開発センター）である。昨年開所式が行なわれ、所長のコリン・ロッサー博士（人類学者）が着任した。

一九七五年の地域集会は「南アジアの山岳、とくにヒンズークッシュ・ヒマラヤにおける総合的生態学的研究と研修の必要性」と題された画期的な集会であった。会議の主目的としては、

一、生態学的に健全な地域開発に対する大きな障害は何か、

二、生態学的総合研究のあり方と重要性、

三、ヒマラヤ地域における右のような問題に関する研修の必要性、

四、資料の集積や情報の流れをいかにして作るか、

といったものであった。そして会議のあと、重要な研究領域として勧告されたのは、

一、山地の大規模な土壌侵食と地すべりに対する対策、

二、山地での人口圧と人口移動をどのようにするか、

三、動植物相の変化を追跡すること、

四、ツーリズムの影響調査、

五、各地での過密と労働要求と関連した人口再配置計画のすすめ方、

ということであった。これらはイシモドで今後調査研究をすすめることになろう。

私はヒマラヤ地域の原始的自然にもちろん大きな魅力と関心を抱いているが、同時に人間活動の影響で山岳の自然がどのように変貌するかというマブ的観点に最大の関心をもち、千葉大学の第一回学術調査登山隊（一九六三年）いらい、森林（極相林、二次林）をはじめとして、とくに放牧地、耕地雑草などに力点をおいて調査をしてきた。わが国での長年の草地調査で案出した草地の状態診断の方法を適用してみたが、ネパールの殆どの草地がひどい過放牧にあることが分かった。ネパールでは稲作限界より上では第一次産業としての牧畜の重要性が非常に大きくなるが、今後とも草地の状態の的確な診断と草地改良の対策を講ずることが必要であろう。

一九六三年の学術調査のあと、私は国立公園や自然保護地域の設定の必要性について政府への報告書をかいた。当時はそれらの体制が全くなかったのである。その私の意見は、その後一九六六年日本で開かれた第十一回太平洋学術会議にさいして、私は「高山帯および亜高山帯における自然保護」という特別シンポジウムを主宰した時、論文として提出した。私の意見も多少の効果はあったと思うが、その後国立公園野生生物事務所が開設され、今や一つの局に昇格して、国立公園自然保護行政が進められていることをうれしく思う。この五月にもこれらに関連した国際集会が、マヘンドラ国王自然保護財団などによって行なわれた。

われわれは当初から一貫してヒマラヤ地域の登山と学術調査を並行させてきた。登山隊員にもエコロジカルな観点からの調査を義務づけてきたが、この伝統は今後も持続させたいものと思っている。ちなみに報告書は日本山岳会の図書室にあるはずであるが、今まで左記のようなものを刊行した。

沼田真編（一九六五、一九七一、一九七七、一九八一）東ネパールヌンブール峯、マカルーⅡ峯、バルンツェ地域の報告書

中馬敏隆編（一九六八）アフガニスタン、ミルサミール峯地域の報告書

Numata, M. ed. (1983) Structure and Dynamics of Vegetation in Eastern Nepal.

Numata, M. ed. (1983) Biota and Ecology of Eastern Nepal.

沼田真編（一九八四）「生態調査のすすめ――ヒマラヤの人々の生活と自然」古今書院

一、作品の売買　当委員会はタッチしない。購入希望者は直接作者に連絡して下さい。

◎出品方法

一、搬入場所　日本山岳会会室

一、搬入期間　昭和60年8月1日（木）～8月10日（土）

搬入搬出ともできるだけ輸送でなく持込みにして下さい。また出品点数が過大となった場合、当委員会で選択させて頂くこともありますので予めご了承下さい。（会員展準備委員会）

訂正　前号八十周年記念行事のお知らせ三段目は「日本山岳絵画展は日本橋三越本店で11月19日～24日、後援朝日新聞社、ＮＨＫ」となります。また企画中のＮＨＫ放映は7月1日20時からです。

八十周年記念展覧会

ピッケル雑記

平柳一郎

ＪＯＳ・ウィリッシュは酒呑みだという浦松さんの一語が、日本における彼の評価を堕した。一度の約束の違背がこのように伝統的に信じられるのも珍しい。呑ん兵衛だから駄作もあろうが滅法な逸物もあるという評価も、この酒呑論の敷衍にすぎない。

この初代ウィリッシュを何本か並べてみると、共通点のいくつかを発見する。それは、ヘッドの長短に関わらずブレードとその幅およびフィンガーの長さがほぼ一定していることである。註文者の希望によってヘッドの長さはきまるが、ブレードとフィンガーの寸法は固定的なので、ピックの長さの調整だけでコトはすむ。つまり、作りやすく経済的なのだ。したがってピックの型状は直線的でなければならない。シェンクやベントの曲線的型状であると、ピックの先端だけの調節だけでは姿に破綻をまねく。

ウィリッシュの豪放にみえる直線の姿は、実は彼の計算された経済的要請から生まれているように思えてくる。彼は醒めた酒呑みで、酒代のために効率的に鍛えたのだろうか、東洋の若い登山家に対して註文を忘れたふりをしたのかもしれない。

彼の思索が家康のように思えることがある。二代のGebrはウィリッシュ作を不動のものにしたし、三、四代は今なお盛んに鍛えて名声を保っている。

シェンクの後裔は、グリンデルワルトで土産物屋の安逸に満足しているし、レッチェンタールのヘスラーや、ツヴァイリュッチネンのエルクの消息は杳としてきかれない。

ルームに浦松さん遺愛のALF・ベントがある。「たった一人の山」にでてくるベントで、著書ではインチの表示だがセンチに換算するとこの作に寸分の相違もない。ウィリッシュの代りにベントにこれを鍛えさせたというが、まさに酒杯を片手に讃美したい逸物である。

この初代ベントは、一八七六年からピッケルを鍛え始めた。マッターホルン登頂後十一年のことである。しかしこれは少々早きにすぎる。二代ベントが一九〇九年生れで七五年の年齢を重ねているが、一八七六年は初代の誕生年ではなかったか。

戦後二代ベントはALFR銘で鍛えていたが、現在はウィリッシュ同様三代に授けられている。この二、三代合作は「BHEND」の銘で昭和三十年中頃から作られ、フィンガーは何故かヘッドに溶接されている。

私は長い間FRITZをたずねてきた。FRITSCHのことではない。高野鷹蔵、西岡一雄両氏だけがこのピッケルにふれている。明治四十三年、加賀正太郎がスイスから持ち帰ったピッケルがFRITZ・JOERGで、A・JOERGは二代にあたる。

ウィンパー時代の所謂「氷斧」のようなものから語感的に「ピッケル」に変移した作品がこのフリッツであり、しかも近代的在銘の嚆矢ではなかったろうか。

かつて大正二年の、河童橋で撮ったウェストンの写真のピッケルについて論争があったが、掌に小さすぎるその作品は、初代フリッツ・エルクのように思えてならない。前述名匠達の活躍は、二代A・エルクの時代で三十センチ以上の作が多かったからである。

門田のピッケルは山内に較べて姿の変化が尠いといわれているが、作品を並べてみると苦悩の色がまざまざとみえる。各時代の考証も山内に較べ番号・年紀もなく模糊としているが、両者とも戦前の作に変化が著しいし、互いに相手の作品を観察しているふしがある。

門田真馬（スケマ）が昭和十年頃、前述浦松氏のベントに酷似した豪放な扇型（刃部直線）を作った。山内の琴柱（ことじ）型の優美さを力で圧する感がある。山内はこの門田作をみていてALFRED（初代ベント初期作の曲線美）を研究したようだ。あ

海外の山

すべてわが山頂

ラインホルト・メスナーが、十二峰目のジャイアントに登った。

ネパール観光省の発表によると、五月十五日、メスナーはダウラギリ主峰（八一六七㍍）を北東稜ルートから登頂、地上十四の八千㍍峰のうち、登っていないのはローツェ（八五一六㍍）とマカルー（八四六三㍍）の二峰を残すのみとなった。

四月二十四日にはアンナプルナI峰（八〇九一㍍）を北西壁から登ったばかりで、わずか三週間おいただけの八千㍍峰連続登頂である。

一九七〇年六月二十七日、弟のギュンターとナンガパルバット（八一二五㍍）に登ったのが、メスナーの最初の八千㍍峰登頂である。

以後七二年四月にマナスル（八一五六㍍）を、七五年八月にはペーター・ハーベラーと二人でガッシャブルムI峰（八〇六八㍍）をいわゆるアルパイン・スタイルで登り、ヒマラヤ登攀史の一ページを開いた。

以後のことは周知の通りだが、とりわけ七八年のエベレスト（八八四八㍍）初の無酸素登頂、七八年のナンガ・パルバット（二度目の登頂）と八〇年のチョモランマ（北面からで、エベレスト二度目の登頂）でのパーフェクトに近い単独行（ベースキャンプに人はいたが）は、世界の登山界に大きな刺激を与えた。

いま四十一歳となったメスナーは、八五～八六年冬期にマカルー、八六年にローツェを登る計画と伝えられており、十四座登頂も大げさな言い方をすれば〝秒読み〟にはいった感じである。

メスナー自身は、自分は八千㍍のピーク・ハンターではない、と言い続けている。というより、彼は記録を書きかえるのが目的ではなく、どのように登るかその過程が大事なのだ、と繰り返し強調している。

しかし、本音は全山登頂だろう。複数の八千㍍峰のピークに立つことだけでも簡単ではないのに、地球上に十四しかないジャイアントの全てに登るというのは、やはりすごいことである。エベレストを四回も登った男がいる時代だから、これからもそうしたヒマラヤ登りをやる人は出てくるだろうが、メスナーはヨーロッパ・アルプスはもちろん、南米、アフリカまで足を伸ばし、困難な登攀に挑戦している。簡単に追随できることではない。

残された二つのうち、ローツェに初めて挑戦したのは七五年春で、リカルド・カシン率いるイタリア隊のメンバーとして参加、悪天候と雪崩で敗退している。

イタリア隊の下山がちょうど同行取材した日本女子エベレスト登山隊の下山と同じ時期だったので、私は、カトマンズでメスナーと話をする機会があった。

いま思えば、例のガッシャブルムに行く前で、三十一歳のメスナーは現在ほどかっこいい存在ではなかった。すでにその力量は広く知られていたが、八千㍍峰もナンガ・パルバットとマナスル（七二年）の二つを登ったにすぎず、それも単独とか、二人パーティとかではなく、普通の登山隊

山をきれいにゴミは持ち帰ろう

る日、忽然と琴柱型から扇型に変り、その優美さに豪快さが加わって七百番代の傑作を生むことになる。この間二年の歳月を要した。その後門田は、ブレードの側肉を落して両者の姿は近づくけれど、信念の確執は寡作と多作とに分かれた。

シェンクとベントを祖とする山内と門田は、フリッツからみれば孫にあたるが、両者は日本の近代登山に質と量とで貢献したといえる。

過日、「山岳博物館を考える会」に出席して、佐々会長撮影のヨーロッパの山岳博物館のスライドをみた。登山の裏面史の物証として時代順に配列された大量の氷斧やスキーやザイルの類が誇らしげに自己を主張し、己の時代を訴っている。日本では新しすぎることが多すぎて、道具類の散逸を防ぐにはもはや遅きにすぎるようだ。

（この原稿は昨年、三水会で平柳氏が話された「ピッケル談義」を、別の角度から書き改めてもらったものです。**編集**）。

お願い

エルクのピッケル借用のお願い

JAC八十周年記念の展示会にエルク（A. JOERG）のピッケルが必要ですが、会員の皆様のなかで愛蔵されている方か所持者をご存じの方は、記念準備委員会までご連絡下さい。展示品として拝借したいと存じます。

（記念準備委員会　平柳　一郎）

お願い

図書紹介

ネパール研究ガイド
——解説と文献目録——

川喜田二郎監修
日本ネパール協会編

大へん便利な本が出来たものである。ネパールについて何か知りたければ、先ず本書を尋ねて見るとよい。立ち所に適切な情報源が手中に在る。

例えばネパールの歴史については、総説・川喜田二郎氏の「ネパールの歴史、社会、経済」を読み、次いで、目録の「歴史」の所を探れば、どんな文献に当ればよいかが判り、更に、巻尾の年表がこれを補ってくれる。

他に、民族・文化—その多様性と類似性（石井溥）、医療・教育教育⇄人間⇄医業、二十年の変化（岩村昇・史子）、自然　ネパールの自然と自然保護（沼田真）、登山　ヒマラヤ登山の歴史（薬師義美）、ネパール案内　ガイドブック作りと地図（五百沢智也）等に就いて、その人ありと知られた執筆者たちの要を得た解説がある。

本書の主部をなす「目録」は三二七頁にわたり、三九三九に及ぶ文献が挙げられ、よくこれだけ方々から拾い上げたものだと感心する。これらは、大小の項目に細かく分類されていて探し易い。中でも「登山」と「探検」、「紀行」の部はその半ば近くを占め、山地別に配列してあって、検索が容易である。巻末には上記の「年表」の他著者名索引・雑誌一覧が添えられている。後者は、文献が単行本のみでなく、多くの雑誌からも引用されているからで、それがどこで発行されているかが判る。項目別の索引は無い。これは前記のように、文献表そのものが細かく事項別になっているからで、本書の特徴の一つとも言えよう。

細かい心配りは方々に見られ、例えば、著者名索引にある番号は文献表頁下隅の番号と対応させてあり、引き易いし、文献表には簡単なコメントや主項目が掲げてあるものが少なくない。年表の日ネ関係も要を得ている。特に、文献欄と番号で対応させている点はよい試みである。

このように、本書は言わばネパールに関するデータベースとも見做し得、これがコンピューター化される日も遠くないことを感ずる。書誌学的に見ても吟味に充分堪え得るもので、その衝に当られた方々の労を多としたい。

本書はネパール協会の二十周年を記念して出版された。かつて（一九六七年）日高信六郎会長時代に出された「ネパールヒマラヤ探検記録」に、その後著しく殖えた資料を加えて、新しい姿としたものである。国内文献だけであるが、その数の夥しいことに日本人のネパールへの心入れを知らされ、感嘆する。これらを土台として、より高い本格的なネパール研究が進展することを望むのは筆者だけではあるまい。

ただ、望蜀の感に堪えぬのは、これだけの本に、付図があまりにも簡単すぎ、折角の描図者、五百沢氏の能力を発揮させていないことである。概念図とは言いながら、せめて平地、山地の別、山脈とその名称ぐらいは同縮尺の中に盛り得た筈なのにと惜しまれる。

一九八四年十一月刊　日外アソシエーツ発行　B5版　四六八ページ　紀伊国屋書店発売　定価九八〇〇円　**（佐々保雄）**

海外の山

の隊員としての参加である。

この時の話の内容は、メスナー自身の山登りのことより、もっぱら日本の女性たちがどのようにしてエベレストに登ったか、の点に集中したと記憶している。ローツェのベースキャンプまで迎えに行った妻のウシー（現在は離婚）も一緒で、彼女の手にしたバスケットの中には二ひきのチベット犬の仔犬がいれられていた。カトマンズで買ったこの仔犬は、南チロルのメスナーの家まで無事運ばれ、幸せに育ったらしい。

その年の八月、ガッシャブルムI峰をハーベラーと二人だけで登り、翌年来日した時のメスナーは、ローツェの頃と較べたら、光り輝やいてみえた。やりたい登り方ができたためだろう。

十二峰登頂に至るまでには、結果的に成功しなかったいくつもの登攀がある。マカルーにしても、七四年春に挑戦して敗退しているし、ナンガ・パルバットには計四度も行っている。

十四峰は多分やりとげるだろう。彼のような登山家には、失敗の記録だけを一つの本にまとめてもらいたいと思う。

（江本嘉伸）

〔標題の「すべてわが山頂」は一九八二年にメスナーが書いた彼の登山歴をまとめた本の題名——**編集**〕

海外の山

（ちくま少年図書館 90）

カンテラ日記
—富士山測候所の五〇年—

中島 博著

登山の対象として、山は高ければ高いほど、色々と面倒な問題をはらんでいる。またそうした問題点は、高所に永く滞在するほど、激しい形で現れてくる。

このような立場から見ると、長期間繰返し山頂測候所に勤務した人たちのメモは、貴重な資料と言わなければならない。登山者は短期間の経験に基づいて、自分は高所登山に強い筈だと、自信を持ちやすいが、富士山測候所に関係して、長い高所経験を繰返した人たちが、意外に脆く遭難したり、激しい障害を受けた例を読めば、決して油断はできない。

富士の積雪期登山に関する問題点としては、長期間の経験に基づいた教訓が簡潔に述べられている（一九五頁）。冬富士を目指す人たちは、じっくりと読み、かつ考えて頂きたい。

本書は少年図書館という叢書に納められているが、内容は成人にとっても読みごたえのある著書といえよう。

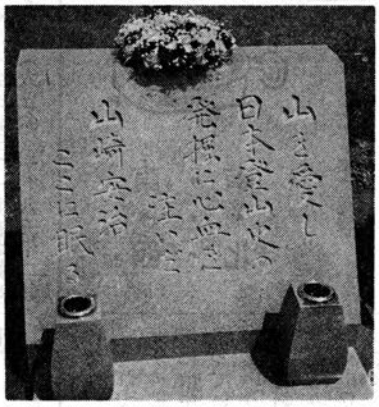
富士山で働いてきた人達が、高所経験が長いにもかかわらず、高度障害に苦しんだり、あまつさえ職に殉じた人たちの例、こうしたことは一般の登山者にはよく知られていないが、近年ヒマラヤの高所で、強いと定評のあったクライマーが脆くも倒れた例などと比較して、私たちはまだ高所障害の本当の姿を知っていないことを思い知らされる。

以上は、主として高所登山の面から見た場合の本書の紹介であるが、こうした内容は本書の一部を占めるに過ぎない。その他の面については、富士山頂での気象観測の概観に始まり、BOAC機や米軍機の墜落（前者では全員死亡、後者ではなんと乗員二名とも山頂測候所に自力で辿りついた）、真夏にはちょっと考えられない登山者の凍死、永久凍土層の存在、山頂で感じる地震の様子、測候所を訪れるカモシカ、狐、鳥、その他の意外な動物のエピソードにも触れてある。なかなか楽しい本と言うことができる。

一九八五年三月三十日　筑摩書房発行　二三八ページ　定価一二〇〇円　（金坂一郎）

追悼
山崎安治君を悼む

関根吉郎



最後に一緒に飲んだのは二月一日、鈴木正俊君の新しいアトリエであった。日本登山史のまとめに忙しかったことに触れた以外には別に記憶に残るようなこともなかったほど、普段と変ったこともなかった。

学生時代は極めて尖鋭的なクライマーであった。軍隊生活は彼の健康を奪い、戦後はまともな山登りはできない身体になっていた。いきおい「書斉の岳人」になるわけだが、元々江戸ッ子的なやせ我慢も身についていて養生なぞは縁が遠かった。陸軍病院を細い体で出てきてから一時は別人のように太った。酒をあおるほど飲んだり、禁酒の時代もあった。最近は痛風などという帝王病に悩まされながら少々は飲み出していた。

私は三月八日に彼がまた入院していることを知った。その翌日病床を見舞ったとき、あまりの衰弱ぶりに驚いた。

九〇〇枚書き続けたという「日本登山史」の原稿をまだ見ていないので、その内容はわからない。日本には江戸時代以前から山頂を神とみる信仰があり、江戸時代に密教とからんで宗教的な登山が始まる。明治時代になると国土の地図作製のための探検的な登山が行なわれた筈である。山を研究の対象にした登山から、山登りそのものを目的とする登山がそれに続く。だから一口に登山といってもその内容は甚だ多岐にわたっている。これを一つの日本登山史にまとめることが山崎君の腕の見せどころであった。

私には何回かの憶い出がある。古書展の会場で、誰も見向きもしない埃をかぶった文献を見つけ、こんなのがあったといって示した満足げな表情は、もう山登りはできなくなった身で、初登頂にも似た喜びを感じていたのであろう。新しく見出した「日本登山史」があと僅かで未完に終ったのは惜しまれてならない。

大登会年誌
（一九五九—八四）

慶応義塾山岳部は昨秋、創立七十周年を迎えた。この山岳部OBは登高会を結成しているが、そのなかで大正時代卒業のOBを主軸とした大登会と呼ぶ集まりも一九五九年から発足した。九十歳の槙さんを先頭に健在な大先輩たちを擁する会である。この大登会も昨年、二十五周年を迎えたので、それを機に、従来の年誌を一冊にまとめて会員に頒つことにした。

編集委員は早川義郎（本会永年会員）、青木孝二、本郷常幸の三氏で、とくに本郷氏が毎回の集会の記録を丹念に整理した上、全巻三百三十二ページに及び大変な分量を、すべて自筆で浄書して、この年誌を作り上げた努力には敬服のほかはない。

内容の多くは懇親山行や集会の愉しい記録であるが、古巣である山岳部、登高会への変ることなき関心と愛情が強く感じられる。また、その間に「登高行」創刊五十周年を記念する一九七〇年の懇親会の記録など、二十五ページにわたる貴重な資料も見出されるし、佐藤久一朗氏による「アイガー東山稜登攀談」のように故人の面影を偲べる好記事等々も収録されて

いる。本会図書室で一覧をお勧めする。（大登会　一九八五年二月刊）

（島田　巽）

東・西・南・北

会員通信

北欧スウェーデンというと日本の人は何を想像するか？　まあ、私みたいに半分スウェーデン人には興味のある所ですが、こと山登りに関しては、もちろん見方次第ですが、二流国といっていいでしょう。

最近になりやっと、首都ストックホルムに山道具、つまり登攀用具を専門に売る店が一軒開店したのです。

それでも一九八一年にアンナプルナの縦走を試みたり、一九八七年には中国側からのエベレストを狙っています。山登りが理解されたというより、継子扱いでも山登りを真剣にやろうとする人が出てきたとみるべきでしょうか。ともかく山登りに興味を持つ人間にとっては、さみしい国です。

ストックホルムにて　大沢宣彦

アラスカへ行きたいと思っている方へ

田部井淳子

今から十年前、エベレスト日本女子登山隊の留守本部を引受けて下さった（元東京岳人倶楽部所属）小笠原のり子さんがアラスカに住むようになってから八年、持ち前の粘り強さを発揮し現地の大学で講座を択り、空調・水道システムの製図士の資格を取得しながらアラスカへ遠征する登山隊のお世話をして参りましたが、この度、アラスカに関するツァーアドバイザーの会社を設立いたしました。

既に三十五隊ものお世話をしており、その経験を生かしてツァーの手配、ホテル、キャンピングカー、列車などの予約は勿論のこと、マッキンリー登山許可申込書、日用食品価格表などあらゆるリクエストに応じたインフォメーションを収集し送付してくれます。

二～三日の短期滞在の旅行から、ファミリー旅行、ハネムーン・キャンプ、軽登山からマッキンリー遠征など、多方面に亘って相談に応じて下さいます。

アラスカに行きたいと思っていでの方はどうぞお気軽にご相談なさって下さい。連絡先は次の通りです。

JAPAN-ALASKA Outdoor Recreation Consultants
P.O. Box 2321
Anchorage, Alaska 99510
(907) 333-7776
Noriko OGASAWARA

三水会現地集会

竹寺には竹の意思があった。食も飲もすべて竹にまつわる。

恒例の奥武蔵竹寺山行は、この二年ほど膝を埋める雪のため、寺側から宿を謝絶されていたが、今年は足下に荀の芽を感じるほど。山なみが寺を囲繞し、峰々が寺の領域を示してその頂きに鐘楼が立つ。

しかしこの山門も現世此岸の世界で、名を遂げた掲額のおびただしさは竹の意思ではなかったし、床を貫き桧皮葺の屋根に達するふしくれの竹も、方丈の破屋にはふさわしいが、肥えた竹幹にこれみよがしの落書きがめだつ。

二尺の竹筒の酒と一寸の竹杯。曲り放題の竹枝の箸に山里の料理はさすがにうれしい。夕の酒は朝粥の膳にも並べられた。

左に奥秩父のまだらの雪に遠い日を想い、行く手に頂上を失った武甲に呕吐して豆口峠に着く。その先、子の権現手前のカヤトの中で、S嬢はチロルを眼深かに被って青春を演じてみせた。相役は赤ベレーのH氏「上原謙かサイタマケン」のヤジがとぶ。

子の権現は健脚の願いをかなえてくれる。しかしふもとの茶みせまで歩ければことはすむ。祈らない人の多かったこと。

茶店のビールを賞して水を飲まなかった人、田舎うどんの貪婪のためにカヤトの休みに間食を禁じた人、朝粥に添えられた竹筒三本の酒に山径を酔い通した人、池袋、新宿、市ケ谷をいくさ話でハシゴした人等々。

早春の悪戯に充ちた山行にみえるが、これは各人の心の中の青春でもあった。

（参加者　今井喜美子、坂倉登喜子、原田幹市、小野利次、高田真哉、重村清、岩堀瑞子、冨田弘平、高橋早苗、松井美恵子、沼倉寛二郎、平柳一郎他八名。—昭和六十年二月十六～十七日）

（平柳一郎）

会員懇談会報告

第二回「箱根の桜と鎌倉古道を歩く」会参加記

斉藤健治

第二十二回　この一本展（下）

図書委員会

藤木九三　著書

1、岩登り術　大正14年7月刊　RCC事務所榎谷徹蔵発行
ロッククライミング倶楽部部員名簿、芦屋ロックガーデン山路図付
2、屋上登攀者　昭和4年6月刊　黒百合社発行
二冊
二冊共　献辞及び詞と署名入
3、雪・岩・アルプス　昭和5年5月刊　梓書房発行
4、槍・穂高・岩登り　昭和6年7月刊　木星社書院発行
5、雲表　昭和6年8月刊　黒百合社発行
6、雪線散歩　昭和12年5月刊　三版　三省堂発行
詞と署名入
7、登臨行　昭和15年12月刊　相模書房発行　B版三百部限定番号入　和歌署名入

この一本展

8、藤木九三古稀記念選集―垂直の散歩　昭和33年6月刊　朋文堂発行　二冊
二冊共　献呈署名入及署名本
9、垂直の散歩　昭和33年6月刊　朋文堂発行

富田　砕花　著書

1、登高行　大正13年7月刊　更生閣発行　二冊
2、手招く者　大正15年11月刊　同人社発行

西岡　一雄　著書

1、泉を聴く　昭和9年9月刊　朋文堂発行　三冊
内一冊は大島堅造氏宛献呈本、一冊は詞と署名入
2、山河をちこち　昭和22年7月刊　朋文堂発行
3、山村好日　昭和24年1月刊　蘭書房発行
4、登山の小史と用具の変遷　昭和33年8月刊　朋文堂発行

水野祥太郎　著書

1、岩登り術　昭和8年9月刊　黒百合社発行
2、岩登り術　改訂版　昭和14年6月刊　黒百合社発行
3、ヒトの足―この謎にみちたもの　昭和59年5月刊　創元社発行

三木　高谷　著書

1、山岳征服　昭和4月10月刊　黒百合社発行

永楽　孝一　著書

1、「山」そのふところにありて　昭和50年8月刊　藤木出版㈱発行

加納　一郎　著書

1、北海道のスキーと山岳　昭和2年11月刊　北海道山岳会発行
2、氷と雪　昭和4年12月刊　梓書房発行

加藤文太郎　著書

1、単獨行　昭和11年8月刊　加藤文太郎遺稿刊行会発行
2、単獨行　昭和16年8月刊　朋文堂発行

R・C・C・報告

1、第一輯　昭和2年12月刊　RCC本部発行　コピー版
2、第二輯　昭和3年7月刊　RCC本部発行
3、第三輯　昭和4年11月刊　RCC本部発行
4、第四輯　昭和6年3月刊　RCC本部発行
5、第五輯　昭和7年12月刊　RCC本部発行

資料

1、岳　DAKE　昭和3年11月刊　岳社発行
2、山小屋7号　昭和7年6月刊　朋文堂発行
3、登攀　昭和8年3月刊　第一神戸中学山岳部発行
4、群巒5号　昭和16年12月刊　神戸一中山岳同好会
5、ケルン3号6号　昭和34年2月・9月刊　朋文堂発行
6、藤木紫蔭　詩抄―若き藤木九三の詩から―　昭和55年4月刊　福地山淑徳高等学校竹毛文庫出版局発行
7、中村勝郎自筆原稿　富田砕花追悼
8、藤木九三氏よりのハガキ一通
9、藤木九三レリーフ

出品者（敬称略、五十音順）
岩瀬晧祐、大島輝夫、小野幸、川崎精雄、島田巽、山崎安治、会報委員会、JAC図書室

この一本展

総務委員会から、四月十四日に会員懇談会の「新会員との日帰りハイキング」を箱根で行なう旨の案内をいただいた。

この春は天気が判然せず、曇り日と雨降りが続いて、三月はとうとう何処へも行かずじまいだったので、天気さえよければ是非参加したいものだと思った。

いよいよ当日となり、五時起床寝室の窓を開けて、これは驚いた。素晴らしい天気だ。

指定の午前七時、小田急線新宿駅の改札口に行くと、既に係の人達が名札から、今日の日程、参加者名簿、山頂で唄う歌まで印刷して配布してくれる。仲々の手際よさだ。

小田急線の車窓には、まだ真白な富士山が輝いている。

湯本からの登山電車の窓外には『そめいよしの』や『しだれ桜』が満開に咲き乱れている。いい眺めだ。

小涌谷駅に着くと、既に四十名位の参加者が談笑している。中に土曜会のメンバーである鶴岡八十五翁の顔が見える。皆、久し振りの好天にうきうきしている。それが顔に現れている。

総務委員から道筋についての説明があり、「日は長いし、天気も良いですから、ゆっくりと登ってきて下さい。私たちは昼食の準備もありますので」、と言い残して先発される。高年、熟年組にはもってこいの、有難い話だ。

それぞれのグループが自らでき春の鎌倉古道を往く。

登るということもない。しかしじっとりと汗ばんでくる。間もなく『千条の滝』に着く。そうめんの様な水が愛らしく流れ落ちている。樹間にこぼれ陽が落ちて小休止を誘う。

青い空を仰ぎながらしばらく登ると分岐点に出る。右の浅間山への道を辿る。十分も歩いたかと思うと、パッと開けた高原状のところへ出る。これが浅間山頂だ。後ろからは相変らず元気な佐々会長が、ご家族と追いついてくる。所用のあった大阪から態々の参加とのこと。

山頂を少し下った、まだ枯草の残る所で昼食ということになった。総務委員達が持参のコンロを幾つも並立して、大鍋に豚汁を作っての大サービス。食事が終わると今度はコーヒーと紅茶のサービスと、いたれり尽くせりのもてなしに皆感謝する。

佐々会長から新入会員の歓迎と会員懇親のこの催しが、老若男女大勢の参加を得たことの意義を強調された挨拶があり、その上、会長ご持参のスイス直輸入のチョコレートが皆に配られ、賞味された。

また、自然保護委員の渡辺正臣会員から鎌倉古道の紹介と、本当のエーデルワイスの栞が参加者に

洋書購入のお知らせ（つづき）

図書委員会

68. **Younghusband, Sir Fracis** 1924
Wonders of the Himalaya
Johon Murray, London, 210 p
69. **Tyndall, H.E.H.**
Mountain Paths. New Alpine Library
Eyre & Spottiswoode, London, 204 p
70. **Kirkpatrick W.T.** 1932
Alpine Days and Nights,
George Allen & Unwin Ltd., London, 198 p
71. **The Authors of Voyage en Zigzag** 1869
Beaten Tracks or Pen and Pencil Sketches in Italy
Longmans, Green & Co., London, 278 p+24 p
72. **The Authors of a Voyage en Zigzag** 1869
Pictures in Tyrol and Elswhere from a Family Sketch-book, 2nd ed.,
Longmans, Green & Co., London, 313 p
73. Zigzagging; amongst Dolomite, London, Longmans, Green, Reader & Dyer, 1873
74. How we spent the summer; voyage en zigzag, 6th ed.
London, Longmans, Green, Reader & Dyer, 1874

以上 74 点が成瀬岩雄氏旧蔵書から購入した洋書です。

* * * *

図書受入報告

昭和 59 年 11 月分受入図書

1. Reinhold Messner "Der Gläserne Horizont" Albert Müller 1982（購入）
2. 尾崎喜八著「山の繪本」 新潮社 昭和 32（購入）
3. 大野精七著「北海道のスキーと共に」 私家版 昭和 45（購入）
4. 木暮理太郎著「山の憶ひ出」 日本文芸社 昭和 45（購入）
5. 赤沼淳夫他著「槍が岳への山旅」 山と渓谷社 昭和 37（購入）
6. 村井正衛著「岩手 八幡平 秋田駒」 山と渓谷社 昭和 36（購入）
7. 八木一郎著「白馬岳と後立山」 山と渓谷社 昭和 37(購入)
8. 山と渓谷編集部編「冬山」 昭和 37（購入）
9. 伊藤正一著「黒部渓谷と雲ノ平」山と渓谷社 昭和 38(購入)
10. 山本三郎 川崎隆章著「富士山」 山と渓谷社 昭和 38（購入）
11. 沼田真編「生態調査のすすめ-ヒマラヤの人々の生活と自然」古今書院 昭和 59（千葉大学ヒマラヤ委員会寄贈）
12. 坂原忠清 松井公治編「Nanga Parbat 銀鞍」 スビダーニエ同人 川崎市教育登山隊 昭和 59（坂原忠清氏寄贈）
13. 大町市史編纂委員会編「観光のなかの大町—その歴史と今」昭和 59（編者寄贈）
14. 菅原達也「山岳句集 氷河卓」 山と渓谷社 昭和 59（著者寄贈）
15. 秋田高校山岳部 OB 会編「インドカシミールヒマラヤ ヌン峰（7135 m）」 昭和 58（編者寄贈）
16. 日本ヒマラヤ協会 カシミール遠征隊編「NUN 登頂 '83 ボクらは遥に K2 をナンガを見た HAJ カシミールヒマラヤ遠征隊 1983 年」 1984（編者寄贈）
17. 金子昌彦編「南ダッカ氷河を攀る インド＝ヒマラヤ CB 山群無名峰（未登峰 5810 m）登山の全記録」 静岡山岳連盟ソサェティインド＝ヒマラヤ隊 1984（版元寄贈）
18. 日本大学山岳部桜門山岳会編「会報 1969～1982 第 26 号」1984（大谷直弘氏寄贈）

12 月分受入図書

1. 「林和夫追悼集」編集実行委員会編 「悪場を超えて，林和夫追悼」 林電工株式会社 昭和 59（林正樹氏寄贈）
2. 日本ネパール協会編「ネパール研究ガイド-解説と文献目録」日外アソシエーツ株式会社 1984（版元寄贈）
3. 平野惣吉著「山人の賦 I 尾瀬 奥只見の猟師とけものたち」白日社 1984（版元寄贈）
4. 長尾三郎著「エベレストに死す」 講談社 昭和 59（版元寄贈）
5. 船橋・山百合の会編「山百合創刊号」 1984 （編者寄贈）
6. 南会津山の会編「いろりばた第 65 号」 昭和 59（編者寄贈）
7. Marek Malaty'nski "W cieniu Kangczendzengi" 1978（堀内章雄氏寄贈）
8. Giuseppe Tucci "Archaeologia Mundi Transhimalaya" Vikas Publishing House 1973（購入）
9. 塚本珪一著「京都の自然，原風景をさぐる」 ナカニシア出版 昭和 59（版元寄贈）
10. 小島烏水著「小島烏水全集 第 3 巻」 大修館書店 昭和 59（版元寄贈）
11. 平川仁彦著「Skier's books 平川仁彦のバッジテスト必勝法」山と渓谷社 1985（版元寄贈）
12. 海和俊宏著「海和俊宏のポールテクニック」 山と渓谷社 1985（版元寄贈）

昭和 60 年 1 月分受入図書

1. 黒岩達介著「ハウツウ・スキー スキーが面白くなる体験的アドバイス」 山と渓谷社 1985（版元寄贈）
2. 泉欣七郎 千田健共編「輝く日本の No. 1」 ナンバーワン 1984（版元寄贈）
3. 広川健太郎編「アイスクライミング」 白山書房 1984（版元寄贈）
4. 日本山岳会編「山日記」 茗渓堂 1985（版元寄贈）
5. 日本山岳会編「山日記」 茗渓堂 1985（版元寄贈）
6. 早稲田大学岳友会編「天の匂い 柳沢幸弘遺稿集」 登攀クラブ蒼氷早稲田大学岳友会 1984（編者寄贈）（以下次号）

贈られ、喜ばれた。但し、このエーデルワイスは栽培されたものであるとの注が付された。

最後に本日の懇親会の計画立案から実施までを中心になって活躍された新会員、南川金一、丸山剛司、武井台三、白井雅巳、大坂敏子の各委員が参加者全員の感謝の拍子のなかに紹介された。

また、特別参加のネパールのマスケ君も紹介され、今後もこうした楽しい催しに参加したいと希望を述べられた。

好天に恵まれた楽しいハイキングも、予定通り午後三時に湯本温泉に着いて解散となる。

解散後は『しだれ桜』のお花見に出掛ける組、湯本駅へ直行して祝杯を上げる組、箱根旧街道の『天山野天風呂』で湯につかり、ビールで乾いた喉を潤す組、等々のそれぞれのグループに分かれて散っていった。

参加者は佐々会長以下七十余名。全員が東京、その近郊であるが、三重県津市から荒木健次会員もはるばる参加された。

佐々会長の『支部交流を活発』にしたいの抱負もあり、また総務委員会の、新しい会員に早く山岳会の組織に馴染んでもらいたい、と言う思惑がこの催しの趣旨であったと言う。ならば、約二十名の新会員が参加した今回は大成功であったと思う。

大修館の山岳図書

図説百科
山岳の世界
N・ディーレンファース、T・ヒーベラー他著
日本語版監修＝西堀栄三郎・宮下啓三
B4変型判・上製函入・310頁 定価18、000円

遙かなりエヴェレスト
—マロリー追想—
島田 巽著
四六判・本文10ポ組・フランス装・292頁 定価1、500円

槍ケ岳開山 播隆
穂苅三寿雄・穂苅貞雄共著
A5判・272頁 定価3、600円

小島烏水全集 全14巻 別巻1
〔第12回配本中〕
3 文庫時代(二)
菊判・上製函入・774頁 定価9、800円

大修館書店

野鳥の本
野の鳥の生態 全5巻
仁部富之助著 萩内正幸挿絵 定価各1、400円
素描集 野の鳥たち〔ある画家のフィールドスケッチ〕
画＝C・F・タニクリフ 日本語版監修＝高野伸二 定価6、800円
森と私とフクロウたち
クレア・ローム著 蛭川久康訳 定価1、300円

〒101 東京都千代田区神田錦町3-24 振替/東京9-40504 電話294・2221〈大代表〉 ●図書目録呈

会務報告

四月理事会

4月15日　午後6時30分
場所　本会ルーム

出席者　佐々会長、田口、山田副会長、田村、神崎、大倉、西村、赤松、河村、松家、長谷川、平井、絹川、村木、梅野、高遠各理事、松田、竹田各監事、飯野、宮下、鴫原、中村各評議員、岡沢理事代行

委任　鈴木理事

審議事項

○日本・スペイン合同マナスル・スキー登山隊一九八五　後援の件
名儀後援について　了承

○科学博ネパール館に対する協力の件　寄付金支出　承認

○昭和59年度事業報告承認の件　承認

○昭和59年度収支決算報告承認の件（監査報告を含む）　承認

○役員改選の件
評議員候補者について　承認
理事（会長、副会長を含む）候補者、監事候補者は評議員会の推薦を受けることで、会長より説明　了承

報告事項

○八十周年記念事業について
▽登山分科会　中国登山準備中
▽行事分科会　8月24日に椿山荘（東京）で記念式典、晩餐会を開催する。展覧会等は8月24日前後に開催予定

▽募金分科会　二次募集を開始、多くの会員の協力が必要、目標額の達成が可能となった、6月30日まで申込受付け

▽集会予定、5月11日（仙台）、6月15日（長岡）、7月14日（札幌）、9月28日（富山）

○山研開所　4月27日

その他、委員会報告、会務報告があった。

ルーム日誌　四月

1日（月）　八十周年展示委員会
4日（木）　海外委、講演会
11日（木）　山の気象講座（科学委）
13日（土）　フィルム映写会
15日（日）　理事会
16日（火）　会員懇談会
17日（水）　山研委
19日（金）　評議員会
22日（月）　フィルム委員会
23日（火）　自然保護委員会
25日（木）　学生部集会
26日（金）　会報編集委、科学委
27日（土）　山研開所

今月の来室者392名

会員移動

退会

2980　矢部　勲
5104　宮沢　雄敏
6081　霜鳥　康夫
6607　荒井賢太郎
6857　五十嵐　克
7518　大久保勝彦
7552　星野　護
7944　阿部　正英
7940　内藤　高一
9088　大工原欣一
9188　川澄　隆明
8198　坂本　博
7044　増田　圭次
8438　阿部　敏雄
5116　島　澄夫
5345　大井　準一

夫婦会員に

4482　塚本　珪一
4957　塚本　幸子

支部変更

5938　佐藤　節子（山形支部）

物故

792　粟飯原健三
2233　宮井　英明
4332　坂口　圭正
5094　鈴木　静雄

代表者変更

7724　波田山岳会→大月義之

八十周年記念事業第二次募金応募者ご芳名

（昭和六十年五月十日まで、敬称略、順不同）

（一〇口）橋本龍太郎（五口）黒石　恒　佐々木孝雄（四口）筒井　稔　高田允克　川津鉄礼　上條敏昭（二口）川越はじめ　佐々木康之　宮原利重　林　幹夫　篠塚貞雄　戸塚守夫　重村　清　小川　隆　清和良晴　和崎俊雄　荻野恭一　雫石鉱吉　羽田英彦　今井洋地　木村俊博　原　喜彬　惠　秀彦（一口）井後幸太郎　谷　久光　木野光一郎　井上孝二　北林嘉鶴子　荒木壮一　大石義豊　平田大昭　日本興業銀行山岳ハイキング部　姫野和記　伊藤　茂　臼田昌一　沢田良子　沖永　裕　鈴木一夫　大塚玲子　加藤正己　前田文彦　前田洋子　徳長　正　田原善治　中田　徹　山中　茂　小西喜助　宮下啓三　浜田文二　宮城恭一　平井和雄（その他）石上隆章（〇・八口）

応募会員数累計　一六三三名

応募口数累計　四〇〇一・五口

金額累計　二〇、〇〇七、七二三円

（訂正）前月号会報の（三口）の塚本茂は増本茂氏の誤りです。

お知らせ

☎ 234-6659

この電話でもお知らせしています

◉創立八十周年記念晩餐会（札幌）

日時　昭和六十年七月十四日（日）午後三時三十分

会場　札幌市中央区北三条西七丁目　北方圏センター

行事　記念山行　七月十三日（土）暑寒別岳（一四九一・四メートル）。山岳シンポジウム　十四日午後三時三十分より。晩餐会　十四日午後六時より開催します。

会費　一〇、〇〇〇円

参加申込み　〒061・01　札幌市白石区厚別中央一条七丁目一五―一―四一〇　日本山岳会北海道支部宛

申込締切日　六月二十九日（土）

記念山行日程　七月十三日午前六時増毛町出発（車）、午前七時暑寒荘より登山、正午頂上、午後五時増毛町着、増毛町泊。

山行参加費　一〇、〇〇〇円（宿泊二食、懇親会費、プール使用料を含む、交通費は別途）

◉講演会

日時　昭和六十年六月二十八日（金）　午後六時半より

場所　日本山岳会ルーム

演題　チャンタン高原の自然（スライド映写有）

講師　五百沢智也氏　科学研究委員会主催

編集後記　西ドイツの青年が『登山と死』について書いている記事を、ある山の雑誌で読んだ。

▼彼は著名な登山家の書いた本から、随時字句を引用しながら、自分の考えを述べていた。

▼エベレストのどのルートをやろうかとか、フリークライミングについてではなく、危険な目にあった自分の山行を振返り、なぜ自分たちが死と隣合わせの山行をするのかを説明していた。

▼『生きていること』の実感を、死と背中合わせの状態で探るのだという。

▼ヨーロッパの、今の若い登山者たちにも『生』についての充実感が欠けているということなのだろうか？

▼自分を取戻そうとする行為の一端に登山があり、その延長上に厳冬季のヒマラヤがあるのだとすると、ヨーロッパの登山はわれわれが考えている以上に厚味があるといえはしないか。

（岡）

昭和六十年六月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五―四 サンビュウハイツ四番町
発行所　社団法人　日本山岳会
発行者　今西寿雄
編集代表　岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座　東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社　技報堂